さくらんぼがり　7

さくらんぼがり　7

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19994585

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ♡喘ぎ, ヨシ霊

師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。今回はヨシ霊です。♡喘ぎを含みます。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

さくらんぼがり　7

霊幻は難しい顔をして眉根を揉んでいた。
夕方の相談所には茂夫、エクボ、芹沢、花沢、律、そして大悪霊最上啓示がいる。
（多い……人がっつーか能力者が多い）
霊幻は全員と気まずいのに、霊幻を除いたメンバーは和気藹々としているのも居心地が悪い。
「霊幻さん、こっちの依頼なんですけど……」
そしてメンバーからのセクハラは続いている。それも霊幻は頭が痛かった。
「……ずっと見ていたんだが、本人の許可無く身体に触れるのは良くないんじゃないかね？」
さらっと。
大悪霊に正論を言われて、残りのメンバーが膝を付いた。
「最上さん……！」
思わず霊幻は後ろの男を仰ぎ見る。
「む、ようやくこっちを見たな」
いやそりゃ気まずすぎて見れなかった、という言葉を飲み込んでにっこりと霊幻は笑う。
「ありがとう……！」
「どういたしまして。他に困ってる事は無いかね？」
「あ、そうか最上さんこの商売の大先輩だったな。それじゃあ……」
「おい待て霊幻」
ダメージから回復したエクボが『待った』をかけた。
「悪霊の手を気軽に借りようとするんじゃねーよ。対価に何を持っていかれるか分かったもんじゃねーぞ」
「え、でもエクボはよく手伝ってくれるじゃねぇか」
エクボは苦い顔をする。自分の存在が霊幻の危機察知能力を下げていることは、前から良くないと思っていた。
「俺様は特殊だ。俺様はシゲオの人生に関わる事を面白いと思って

るし、自分から進んでやってる。言っちゃ悪いが……霊幻じゃなくてシゲオの手伝いをしてんだよ。霊幻、お前が安全に俺様と関われるのは、シゲオという抑止力があるからだ。お前に何かしたら俺様どんな目に遭うか分からねぇからな……」
だが最上は違う、とエクボは続ける。
「霊力が戻ってくりゃシゲオですら敵うかどうか分からない相手だ。いいか、易々と隙見せんじゃねーぞ」
「……おう」
霊幻は冷や汗をかく。
ニタア、と後ろで最上が笑ったような気がした。

トントン、とドアがノックされた。

「どうぞ〜」
ぱっと営業スマイルに戻って霊幻は来訪者を受け入れる。
「邪魔するぜ」
「……なんだヨシフか」
見慣れた坊主頭に、すっと霊幻は真顔に戻った。
「なんだとはご挨拶だな、先生。この間変なところで電話が切れたから、心配して来てやったのに」
「あー、あれか！悪いな〜」
ヨシフの後ろから、ぬっと地味な紺色のスーツを着た鈴木統一郎が現れて霊幻と芹沢、そして茂夫が驚く。
その後さらに鈴木将まで現れて次は律も驚いた。
「ココに来る能力者ってのは桁違いばっかりだからな。それがセクハラしただのしてないだので揉めたら俺１人では手に負えん可能性があったからな……鈴木についてきてもらった」
「ショウまで最近は政府に協力してるの？」
「あ、いや俺は親父が外、出るからってヨシフさんに声掛けて貰ったんだよ。後で家族でメシ食う予定。で、なんとか相談所？行くって言うから、面白そうだなって思ってついてきた」
律の質問に将が朗らかに返す。
「しかしなんだこれ……なんか集まってるメンバーが予想より凄い

んだが」
ヨシフが呆れたように霊幻を見ながらタバコに火をつける。
「で、誰に手を出したんだ、霊幻？おおかたアンタの悪癖が原因だろ」
霊幻は顔を手のひらで覆った。
「……」
「全員です」
答えない霊幻に代わり、おずおずと芹沢が答えた。
「ほーん全員……全員！？」
ヨシフが目を剥いてタバコを取り落としかけた。
「ばっっっっかじゃねぇの！？何考えてんだよ！！」
「……俺もそう思う」
「あんたらもあんたらだ、こいつの悪癖途中から分かってただろ！？よりによってなんでこんな地雷に引っ掛かるんだよ……他に選択肢あっただろ……」
気まずそうにメンバーはヨシフから目を逸らす。
「悪癖ってなんだ？」
将がぽかんとして訊く。
「うむ。仕事をするのだから情報共有して貰わんと困る」
統一郎の言葉にヨシフはため息をつく。
「言っていいか、センセ？」
「…………どうぞ」
「まぁ……男遊びだよ。一晩で相手を変えるタチの悪いやつだ」
将と統一郎はマジマジと芹沢を見つめる。
「何やってんだよ、芹沢……」
「……っ、霊幻さんは遊びのつもりだったかもしれないですけど、俺は本気ですから！！霊幻さんと付き合えるなら付き合いたいんです！！」
「ぼ、僕もです！」
芹沢に茂夫が続く。
「僕だって！」
花沢。
「僕も……！」

律。
「私もだな」
さらっと最上が続いた。
「……まあ霊幻の野郎がどうしてもってんなら」
しぶしぶ、といった感じでエクボが締める。
「……なんつーことをしてくれたんだ……」
ヨシフが額を押さえて俯く。
「いいか霊幻、セクハラがどうのこうのって話どころじゃ無くなった。ここは核格納庫みたいなもんだ。お前の一言で発射される、な」
「そんな大袈裟な……」
「分かってねぇな……とにかく、見張りに鈴木を置いて行く。俺は上に報告しなきゃいけねぇから」
ヨシフはイラついた様子で頭を掻きながら相談所を出ていく。
「という訳だ。終業時間まで世話になる」
統一郎が壁にぴったりとくっついて立ち始めたので、霊幻はパイプ椅子を２人分取り出す。
「あー……お茶飲まれます？」
「いや結構」
「ありがとうございます、いただきます」
芹沢が立って将の分のお茶を淹れに行った。
「……」
「……」
じーっと相談所内を見張る統一郎の目線の中、居心地の悪い時間をメンバーは過ごした。

「あ、俺そろそろ学校の時間なんで」
芹沢が立ち上がって鞄を肩にかける。
「おー、お疲れ。じゃ、今日はこれで解散な」
「「「はーい」」」
「最上さんもついて来ないでくれよ？これからはプライベートだ」
「む。……分かった」
相談所から出て行ったメンバーが散って行くのを見て霊幻はホッと

ため息をつく。相談所を施錠して、一度アパートに戻ってから出かける。
目的地への途中で、電話が掛かってきた。
「……はい、霊とか相談所です」
『よう、先生。ヨシフだ。今から飲みに行かねぇか？』
「今からか？……まぁ、いいけど」
『昼間はロクに相談を聞いてやれなかったからな。いつものバーでいいな？』
「ん、いいよ」
パタンと携帯を閉じて、霊幻はウキウキしながら行き先を変える。
ヨシフとは滅多に会えないものの、霊幻にとって数少ない飲み友達だった。ほとんどは能力者について霊幻が喋らされるばかりだったが、痛くない腹を探られるのは霊幻は平気だった。それよりも気の置けない人と居るのが楽しいのだ。
それは男漁りよりも優先させるべきものであった。

※

行き慣れたバーのカウンターで、ヨシフは霊幻を待っていた。
「お待たせ。俺、ウーロン茶で」
霊幻がバーテンに注文する。
「今日はレモンサワーじゃねぇのか？」
「……大失敗したから、しばらく酒はいいわ……」
茂夫との事を思い出しながら霊幻は苦笑する。
「そうか。で、何がああしてああなった？」
ヨシフは霊幻の悪癖を知りながら変わらず接してくれる数少ない人物である。
霊幻はウーロン茶を啜りながら、最近のことを存分に愚痴った。
「だっはっはっは！あー、なるほどな。『こいつにはヤらせたのにお前はダメ』は言えんわなぁ……！」
「そうなんだよ……あ、すまん、ちょっとトイレ」
ゲラゲラ笑うヨシフはヒラヒラと霊幻に手を振る。
霊幻の視界から消えた瞬間、真顔に戻った。

「コーラ１つ。レモン付けてくれ」
バーテンはグラスにコーラを注いで、カットレモンをそえた。
ヨシフはレモンを絞ってから、ポケットからジップロックに入れられたカプセルを取り出し、コーラにその中身を割って入れた。
（レモンに味が馴染むようにカクテルしてきたのに、とんだ誤算だ）
カラカラとよくストローでかき混ぜていると、バーテンがサッとコーラを取り上げた。
「こちらはお取り替えしますね」
コワモテのヨシフ相手に大した度胸だ、と思いながらサッとヨシフは警察手帳を提示した。
「捜査にご協力をお願いします。……疑わしいなら最寄りの警察署に確認してもらっても構わない」
ヨシフがそう言うと、バーテンはしぶしぶとコーラを元に戻した。
手帳をしまいながら、ヨシフは霊幻を待つ。
「あれ？何このコーラ」
「可哀想な霊幻先生に、俺から奢りだよ」
「はは、さんきゅ」
席に戻った霊幻がぎゅっとレモンを搾り、かき混ぜて口に運ぶのを、気付かれないようにヨシフは見ていた。
数十分後。
「あれ……疲れが出たかな……なんか、身体に力が、入んねえ……」
「大丈夫か？おい、会計頼む」
ヨシフは代金を払って霊幻に肩を貸す。
「わりぃな……」
「いいさ、近くのラブホ入るぞ」
ヨシフは霊幻を担いだまま、部屋をタッチパネルで選ぶ。
「ホントすまねぇ……飲み代、財布から持って行ってくれ……」
ベッドに倒れ伏しながら霊幻が呻く。
「いいさ、奢るよ。……なんてったって、今日は経費だからな」
「んえ……？何……？」
「霊幻、霊幻、こっちを見ろ」

ヨシフは霊幻の目の前で指を鳴らす。
「ん……」
焦点が合わない。
「霊幻、お前初体験はいつだ？」
「おとこ？それともおんな？」
「男だ」
「２３の時……」
「よし、効いてるな」
ヨシフはホッとしたようにため息をつく。
（先生に盛ったのは自白剤と筋弛緩剤のカクテルだ）
効き方には個人差がある。が、霊幻は綺麗にキマってくれたようだ、と胸を撫で下ろした。
「霊幻、お前の望みはなんだ？」
「……昔に戻りたい……」
「いつ？」
「モブと寝る前……」
「……そうか。これから何をしようとしている？」
「引越し……」
「何故だ？」
そんな話は初耳だ。少し驚きながらヨシフは尋問を続ける。
「自由にしてやらないと……」
「何を？」
「みんなを……」
「誰のことだ？」
「モブに、せりざわ、はなざわくん、りつくん、に、もがみさん……」
「自由とは？」
「みんな……かんちがいしてる……おれなんかに、とらわれちゃ、だめだ」
強い口調に、ヨシフは息を飲む。
「だから……だれにもしられないうちに、ひっこしするんだ……」
「それであいつらが救われるとでも？」
「ほかに……しゅだんがない……」

「傲慢だな。それに浅慮だ。能力者を甘く見てる」
「ふふ」
「何が可笑しい？」
「いまさら。おれはごうまんであたまのわるい、さいていのおとこだよ。おれなんかだいっきらいだ」
「……能力者に何かさせようとは思わないのか？」
それこそ霊幻が望めば国１つ、いや下手をすると世界を獲れるメンツである。ヨシフは緊張に手のひらを汗で濡らした。
「……しゃかいべんきょう……」
「社会勉強？」
「りっぱな……しゃかいじんを……やってほしい……」
ヨシフの肩から力が抜けた。
自白剤が効いている霊幻の言う事は全部本音である。
（ある意味霊幻の目があるうちは、あいつらは暴走しないのでは？）
そうひとりごちながら、ヨシフはばさばさと服を脱いでいく。
「なんで……ぬぐの……」
「アンタが能力者達に何をしたのか調べておかないといけないからな」
服を脱いで畳んだヨシフは、次は霊幻の服を脱がせる。
「えっ……やんの……？」
微かに霊幻が抵抗する。それを押さえ込んでヨシフは淡々と服を脱がせる。
「おまえとは……ともだちでいたい……」
「センセ、俺にはやらせてくれないのか？」
少しからかうようにヨシフが言うと、霊幻は少し考える。
「……いいよ。よしふになら、いい」
「そうかい」
「たとえ、りようされるだけ、だとしても」
ふわり、と美しく霊幻は微笑う。
「おれはよしふのことが、すきだから」
「……っ」
詐欺師まがいの男の心からの『好き』にヨシフは目眩がした。

「……みんなコレを喰らったのか」
呟いてヨシフはベッドに上がる。
「男は初めてだからな。痛かったら言えよ」
「だいじょうぶ、きょうはあそぼうとおもって、あらってほぐしてきたから」
うっそりと微笑んで霊幻はヨシフを抱きしめる。
「すきにしていいよ。おれ、よしふになら、なにされたっていいんだから」
──嘘つきめ。
ヨシフはそう言いたくなるのだが、自白剤を盛ったのはヨシフ自身だ。
霊幻の心から出る言葉が、だんだんヨシフを追い詰める。
「口開けろ」
「きすする？」
「そうだ」
「ん……」
手入れされた唇にカサついた唇を重ねる。柔らかい、が、めちゃくちゃ上手いという程でもない。
（そういや筋弛緩剤盛ったんだったな）
抵抗されたら困ると思って仕込んだ薬に、少しばかりヨシフは後悔した。
（これじゃあコイツの技は分からないかもな……）
「ん、ふふ」
「……どうした？」
「きもちいい……」
耳に吹き込まれた声にぞくりとさせられ、ヨシフは前言撤回する。
（センセイの真価はおそらく、『口』だ）
「あ、あァ……っ」
身体に手を滑らせれば、聞き心地のいい声で甘く鳴く。
男を夢中にさせる、睦言。
（計算でも恐ろしいが、これが無意識なのが１番恐ろしいな……）
ヨシフは手を下に滑らせて、後孔に指を差し入れる。
「ん……っ！」

息を詰めた霊幻の締め付けに、ヨシフは驚く。
（筋弛緩剤を仕込んでコレか……！）
素の状態であれば、とんでもない名器だろうことが予想がつく。
「センセ、痛くないか？」
「ぅんっ……ゆび、ふやして？」
黙ってヨシフは指を２本に増やす。
「うふ、ふ、じょおず……♡」
「そいつはどうも」
ヨシフはさっさと３本に増やし、慣らしを終えた。
「霊幻、挿れるぞ」
「ん……う！」
挿入の衝撃に眉をひそめる霊幻に、ヨシフは冷や汗をかく。
（いや。いやいやいや。どんっっっな名器だよ……！）
「あっ、あ、ぁ……っ！」
気を抜くとヨシフでさえすぐ気をやってしまいそうだ。
「よしふ、よしふ……っ！」
快感に涙を浮かべる霊幻が、手を伸ばしてきたのでヨシフは手を握ってやろうとする。
が、その手を掻い潜って、霊幻は、ヨシフの頭を抱き抱えた。
「なかないで」
「は！？」
驚いてヨシフは自分の顔に手をやる。
確かに、はらはらと涙が溢れていた。
「なんっ……これ……」
「だいじょうぶ。きにせずきもちよくなって。だいすきだよ、ヨシフ」
よしよし、と霊幻がヨシフを優しく撫でる。
「なんにもこわくないよ。おれはよしふをきらいにならない。だいじょうぶだからな」
ぶわ、とあふれる涙の意味も分からず。
ヨシフは精を霊幻の中に擦り付けた。

※

「えーでは、第四回……」
「霊幻新隆被害者の会ってのはここか」
ガチャ、とカラオケボックスの扉を開けてヨシフが入ってくる。
「灰皿かしてくれ」
たっぷりとタバコを吸ってから、
「……入会希望だ」
そうのたまった。
「何やってるんですか、ヨシフさん……」
「ミイラ取りがミイラになってちゃ世話ないぜ」
呆れた芹沢やエクボの声にヨシフは片眉を上げただけで応える。
「……この中で霊幻に『ヤらしてあげるからちょっと自衛隊壊滅させてきて♡』って言われても絶対にやらないやつだけが俺に石を投げるんだな」
「「「「「「……」」」」」」
全員ナナメを見る。
「……えー、じゃあ恒例、師匠の可愛いところベストテンを決めます」
茂夫がホワイトボードに数字を書き込む。
ふっ、と煙草の煙を吐いて。
「……子供好きなところ」
ヨシフはそう言い放った。

「「「「「「「自分が好きなままで相手に嫌われようなんて、土台無理な話だ」」」」」」」

続